

「^{たん}淡 ^{せい}青 ^{まる}丸」航海記

市立函館博物館館長 石川 政治

淡青丸は東京大学海洋研究所の研究船である。300^ト不足であるが、研究室や装備が優秀で、海洋化学、海底地質、海洋生物学の共同利用研究に使われている。

私は昭和43年、厚岸沖の大陸棚の貝類調査、翌44年、恵山沖の深海の貝類調査と、2回淡青丸に乗船して調査を行ったのでその航海のあらましを紹介する。

厚岸沖航海 (KT. 68-9 CRUISE)

昭和43年5月20日、十勝沖地震の直後、淡青丸は岩手県宮古港を出港した。その朝宮古港は霧雨にスッポリぬれてかすんでいた。ここは景色がよく陸中海岸国立公園の一角で、榎本艦隊の海戦で知られているが、その模様を記した記念碑が丘の上に建っている。出港の前日丘の上の記念碑をたずねた。みちのくの春はおそく丁度山ザクラが満開であった。

淡青丸には私のほか、北大水産学部元田茂教授（現東海大）など一行7人、それに東大海洋研究所の大森信助のあわせて9人のメンバーである。宮古港を出港して太平洋に出た淡青丸は一昼夜 245^{ノット}航走し、翌21日正午には釧路沖 (42N, 146E) の第1ステーションに到着した。ここは日本海溝で水深 4,000m。さっそく北大班はプランクトンの現存量の測定、海水中のセストン分析などの観測を開始した。22日までこの調査を行なった。

明けて23日の真夜中零時、調査開始のベルで私はベッドから叩き起された。海上は真の闇、厚岸沖は雷をともなった豪雨。稲光がホワイトサイドの淡青丸をピカピカりと

青白く照らすと同時に耳をツンツンと雷鳴。私は雨ガッパに身を固めて船尾のデッキと研究室の間を走り回った。立って歩けぬ程の時化で、用意したスミスマッキン採泥器は使えず、新野式ドレッジを使って大陸棚の貝類を5カ所で採集した。明け方5時頃この作業を終了した。その日は厚岸沖の大黒島沖に投錨、24日厚岸沖を立ち去りエリモ岬をかわし25日正午すぎ無事函館港に帰港した。



—淡青丸航跡図—

恵山沖航海 (KT. 69-16 CRUISE)

翌44年9月27日、淡青丸で岩手県大船渡港^{おおふなと}を出港した。出港の朝、地元大船渡の貝類学会の千葉蘭児氏が見送りに来てくれた。前回厚岸沖の大陸棚を調査したので、今回はエリモ岬、恵山間の漸深海底の貝類のドレッジを企画した。したがって網は深海用に作られた中井式ビームトロール改良型を使用した。この網は三重になっていて、中の2枚はガーゼの様なもので出来ていて、網の底はぬっていない吹流し、深海の泥は網の底からドンドンぬけ出て、網の中に底棲動物だけ残る仕組みになっている。大船渡沖のテストでは水深600mで、8mmのピアノ線990mをくり出し、ナマコ、ヒトデ、魚類、巻貝のネジスキバイなどが沢山入り、テスト成功。一昼夜航走し、翌28日早朝、水平線の左



<淡青丸 S44.9>

手に下北半島の山々、右手にエリモ岬がかすかにみえ出した。水深 1,250m、1,020m、840mの各点でドレッジを行なった。北日本の深海では未記録のハラブツノガイなど17種の深海性の貝類を採集し、大収獲。

つづいて噴火湾に入り、東京大学理学部古生物学教室鎮西清高氏一行の企画した噴火湾の海底地質とベントスの調査を開始した。

9月29日から10月2日まで、室蘭沖、噴火湾あわせて45のステーションで、スミスマッキン採泥器を使って底棲生物を調査した。その合間、池谷仙之氏（現静岡大助教授）は、フレーザーコーラーを使って海底の有孔虫を調査した。秋口の噴火湾も時化ると結構波が高く、2日程調査を中止した。

豊浦沖で仮泊した晩、船尾でサバ釣りをした。一晩で30^尾程のサバを300尾程釣り上げた。10月3日恵山沖をまわって正午頃函館港に帰港した。

（調査結果：貝類学雑誌28巻1号、29巻4号参照のこと）

（いしかわ まさじ）

研究と資料

箱館戦争を紀行する

産業経済の進展と、社会構造の変移は、生活様式をも変貌させ、貴重な資料の散佚と破壊が、急速に進みつつある。

各市町村に於いても文化財保護の重要性が認識され、その保存が改めて検討されてきた。郷土博物館設立の機運は各地に拡がりつつある時、箱館戦争資料調査費が予算化されたことは何よりもありがたく、心強いことで、これを第1段階として、年々調査の枠を拡大して行く計画である。

その手はじめに戦争の痕跡を訪ねて、海一つ隔てた青森市油川町にある明誓寺という古刹を訪問したのは4月末の肌寒い日であった。

寺は寛文3年の創立とあるが、火災に遭い、文政10年、現在の伽藍を完成している。幸い昭和20年8月の戦災にも焼失を免れた寺である。

明治元年10月26日、箱館府知事清水谷公考以下、松前、津軽、大野、福山の各藩兵は、蝦夷地鷲の木に上陸した脱走軍に敗れて青森へ退却し、民宿の一冬を過ごした時、明誓寺は福山藩兵の宿陣となり、翌年4月6日、箱館へ再進撃するまで使用された。

当時の福山藩（備後阿部11万石）は隊長岡田伊右衛門外会計、小者75人、兵隊は9小隊437人、夫卒109人で、そのうち156名が明誓寺に宿泊していた。

「兵隊は本堂その他を占拠し、雪の多い12月から翌年2

月頃までは、毎日本堂の廊下に集合し、新しく支給された鉄砲を持ち、棒鉦などの調練のたびにドシンドシンと鉦の台尻で、廊下の敷板をつつき、今も残っている多くの傷跡はその時の調練の跡ですよ。それが終われば笛、太鼓、ラッパ等の調練が行なわれ、振動のためでしょうが、そのたびに仏様が踊り出す始末で、朝の勤行どころの騒ぎではなかったらしいです」。



＜福山藩兵の水筒＞

当時から数えて3代目に当る大井住職の淡々たる言葉に、注意してみるとなる程、厚い桧板に深ふかとめりこむようにつけられた無数の傷跡は、百幾年前北地厳寒の中で、無為に冬籠りの日を送ることより出来なかった士気横溢な福山藩兵が形見をここに残したのである。

明治2年5月18日、箱館戦争は終りを告げ、降伏した脱走軍（新選組及び海軍方）は英船アルビオン号で青森へ護送され、うち203名は、奇しくもこの寺に一時拘禁された。恭順の意を表した降卒は「発句、川柳、地口ナドヲ催ス……」とある。これらの句や記録は残念ながら、何一つ寺に残されていないが、新選組隊士中島登の拘禁中の覚書には「此くとも後に甘味よし櫛の柿」という句が書き残されている。この寺に長い間保存されていた、「陣中」と筆太に書かれた大型の炭取りと、だれか悪戯に書いたと思われる「福山宿陣」と判読出来る標札の二品を住職のご厚意で、寄贈いただいたことは何よりの収穫であった。

（五稜郭分館庶務係長：西田祐一）

五稜郭懐旧館と片上楽天

大正7年8月、博物館五稜郭分館横に現存する兵糧庫内に「懐旧館」と称する民間の手になる教育的観覧施設が開設されている。明治初期創設された函館博物場とは、無論比較の対象にはならないが、当時市民が接し得た教育的観覧施設といえば大正8年の「北海道拓殖館」、同15年公開された函館図書館地学標本室のみであり、この「懐旧館」開設は貴重な役割りを果たしたものであることはいままでもない。しかるに北海道教育史（全道編4）には、「懐旧館」を基礎に昭和6年開設された「函館史蹟館および宝物殿」についてしか記述していない。そこでここでは「懐旧館」について紹介しておくことにする。

「懐旧館」創設者は、片上良、楽天と号す。愛媛県松山市の生まれ。明治11年同県師範学校小学校速成師範科卒。のち小学校訓導補、司法省執達吏等を経、明治41年北海道に移住。同年6月根室新聞社に入社。翌42年4月主筆記者の地位にありながら早くも退社。その後国後郡下の戸長役場に奉職、一応戸長まで就任となる。

極めて転職癖の強い人物であるが、反面知力と文才には富んでいたようで、中央新聞の懸賞広告文に応募し幾度も入選している。

大正3年、「五稜郭」が函館区公園として広く一般に開放されるとともに、楽天もまた五稜郭及び箱館戦争の研究をはじめている。主に函館要塞司令部、図書館を訪ね、また当時の維新史研究書にもひととおり目を通す等一応徹底した研究を行なっている。その集大成として、同5年には「五稜郭小史」を脱稿。これが「懐旧館」開設の基礎となったことはいままでもないが、翌6年4月15日の「五稜郭懐旧館設置趣意書」によれば、同館開設の経緯とその趣旨がほぼ理解できる。

すなわち「五稜郭小史」を編纂して「同趣を説明し普く天下に紹介して来観者招致の資に供したりといえども婦女老若及び文盲者に対して未だ素志の貫徹せざる者あるを憂ひ百尺竿頭更に一步を進め文学と言語のほか美術的形体をもってこれの説明をなし……当時の実況を顕はし歴史的説明を為すと共に教育資料に供せん」と企画したのであった。

明らかに教育的観覧施設として、その開館を目指したのであるが、「史実説明五稜郭懐旧館計画書」によれば、

人形を使用して、箱館戦争の展開過程を「開陽丸激論の場」「黒田官軍参謀居室の場」「千代ヶ岳陣屋の場1・2」「古屋彰義隊長湯泣の場」と各場に別から説明しようというのである。今日でいうパノラマ展示である。

開設当初は、大西亀三郎という協力者を得て運営されていたが、彼の死亡後はほぼ楽天一人で運営されることになった。とはいえ、展示、清掃等の管理は勿論のこと、「五稜郭と箱館戦争に関しお尋ねあらば飲んでお相手せん」と来観者の中に積極的に入り込んで説明することを忘れてはいない。今日、「観者感想録」と題する大学ノートが6冊残されているが、「懐旧館」のあり方に対する観覧者の自由な意見が余すところなく記されており非常に興味深いものである。一部引用してみると「史実の正否は今考察の暇なけれども国史の民衆的教育法として甚だ良法を認む。」

(新潟県下教育視察員)、「歴史事実を斯くの如き方法にて保存する可。」(第二早稲田高等学校生)等というように、教育方法の面での評価はかたく、「智識を実物指教の点に於ては現在古戦場に設立されただけなかなか観覧者に強いインスピレーションを起させる。」ものであったようだ。ちなみに大正14年の入館者数をみると、8・9月をピークに年約3万人入っている。

このことから、「一時的興業師の輩」と違い「陰レタル史実ヲ明ラカ」にしていこうとする楽天の「懐旧館」はかなりの教育的効果をあげ得たことは想像にかたくない。今日、博物館五稜郭分館に収蔵展示されている資料の中には、この楽天の力によるものが多数あることは特記されてもよいであろう。以上参考までに記すことにした。

(五稜郭分館書記 柴田幸生)

市立函館博物館沿革史 (その2)

＜開拓使東京出張所内仮博物館＞

サラニupp創刊号で開拓使最初の博物館として、北海道物産縦覧所について略記したが、この施設は翌明治9年には、仮博物館と改称された。この経過について、開拓使事業報告には「明治9年2月、仮博物館と改称、従前の陳列



(仮博物館内庭園)

場(所)を広く、物品亦随つて多を加ふ」と、記載されているだけで具体的な改称の理由は述べられていない。

明治8年8月北海道物産縦覧所が開所

した直後、日露両国間の永年にわたる千島樺太交換ということで一応結末がつき、現地における交換実務は開拓使が担当することとなり、時任為基、長谷部辰連の両氏が理事官として、黒田長官はオブザーバーとして千島、樺太、カムチャッカに出張した。

この際黒田長官の命により、カムチャッカの首都といわれるベトロ・パウルスク、中部千島の新知及び得撫島、北千島の占守島等で、今までわが国に知られなかった北方民族の資料が集められ、船で直接東京に送られた。(この資料については次回説明の予定)これ等の新しく入手した資料を展示するためにも、従来の施設を拡大する必要があると思われる。

従来、この仮博物館に関する記録としては、開拓使事業報告・開拓使日誌・開拓使一覽などの断片的なものより知られていなかった。



東京芝開拓使東京出張所内
(仮博物館の正面)

近年北海道に所蔵される開拓使関係の簿冊が整理され、その中に仮博物館関係の文書のあることを知り、札幌出張の際一見したが、公的な往復文書が多く、それで明治初期の博物館の実態を具体的に知る事は困難と思われた。

幸い最近北海道新聞本社写真部の渋谷四郎氏から、北大にあるこの仮博物館の写真のコピーを贈られた。この写真を参考にして次に紹介する横浜毎日新聞の記事を読むと、開拓使の仮博物館の実態がある程度理解できると思う。

明治9年5月31日付、横浜毎日新聞(新聞集成明治編年史ヨリ)【芝開拓使の庭園】東京芝増上寺開拓使出張所の裏手なる同使の博物館は十畝の喬木が満場に殖繁り林藪あり葡萄あり、種々の奇卉香草を植へ付け盆栽の花は四面に紅白の花甍を布き詰めるが如く真に一個の小公園なり。

獸類は大なる野牛一頭綿羊五六頭熊二匹。其園内に小博覧会の設あり。北海道地方の珍禽奇獸を乾し固め、巧みに其の全体を存する者夥しく、或は各種の獣皮或は焼酎に浸たる種々の獣類あり。

或は海藻山花或は北海道にて製したる薫の鹿薫の鮭、蝦夷人の漁艚に用ゆる三人乗の皮張り舟、漁艚に用ゆる草衣、土人の細工物、又札幌本



(仮博物館内の檻)

庁に用諸建物より山水の景残らず写真に写し取りて縦覧に供へたれば、其実況真に三百里外を坐上に見る如くなりと東京探報が申越し升たから博雅の士は一度ここに遊覧されてはいかが、縦覧料は一人毎に五厘の由」

この記事を従来博物館関係者が見落して来たのは、タイトルが開拓使の庭園とあり、その中に博物館の記事があるとは思われなかったためであろう。

(学芸係長：姫野英夫)

最近受入れた資料

- ◇シルクハットなど 44点
 【南木と志・函館市駒場町7-5】
 ◇ランプ 1基
 (安田製獅子印・高さ57.5cm)
 【山本幸吉・亀田郡亀田町字本町32-267】
 ◇明治2年創建金比羅宮棟の菊と紋章と頒与の記 1点
 (額に納めてある)
 【桑原クラ・函館市宝来町20-18】
 ◇刺子(ちぢれ差し) 1枚
 刺子(枳形差し) 1枚
 (明治初期絵山部熊石村で使用したもの。枳形
 のものは防空ずきんに改造)
 【石橋仁三郎・函館市住吉町9-5】
 ◇東京大相撲番付綴 2部
 (明治36年5月より昭和44年11月場所まで)
 相撲雑誌 21包
 (大正5年より最近までのもの)
 【加賀屋慶次郎・函館市上新川町17-4】
 ◇農機具 13点
 (官軍に降服を申し出た榎本と官軍黒田参謀の会
 見の農家中村家所蔵の農具)
 【中村秀雄・函館市八幡町16-18】

入館者統計

昭和45年度常設展

区 分	本 館			分 館			郷土資料館			総計
	個人	団体	計	個人	団体	計	個人	団体	計	
大 人	5245	918	6163	34605	5028	39633	1769	235	2004	47800
小 人 (学生・生徒)	3725	14003	17728	9616	6125	15741	793	797	1590	35059
計	8970	14921	23891	44221	11153	55374	2562	1032	3594	82859

昭和45年度特別展

区 分	銭亀古銭と新資料展(45.4.25-5.31)			五稜郭戦争と新資料展(45.7.28-8.16)			総計
	個人	団体	計	個人	団体	計	
大 人	6799	495	7294	17941	916	18857	26151
小 人 (学生・生徒)	3312	10381	13693	3196	205	3401	17094
計	10111	10876	20987	21137	1121	22258	43245

昭和46年度常設展(46.4.1-46.5.31)

月 別	区 分	本 館			分 館			郷土資料館			総計
		個人	団体	計	個人	団体	計	個人	団体	計	
4	大人	313	0	313	2511	160	2671	172	0	172	3156
	小人	287	0	287	774	0	774	79	0	79	1140
	計	600	0	600	3285	160	3445	251	0	251	4296
5	大人				8966	228	9194	185	39	224	9418
	小人				3743	3525	7268	39	9	48	7316
	計				12709	3753	16462	224	48	272	16734
総計		600	0	600	15994	3913	19907	475	48	523	21030

※ 本館は45年4月1日～4月11日の分

カラフトアイヌ展(昭和46年度特別展)

(46.4.20～5.30)

区 分	個 人	団 体	計
大 人	5,241	357	5,598
小 人 (学生・生徒)	1,842	12,400	14,242
計	6,083	12,757	19,840

備考：大人個人の中に260人の招待者を含む。

博物館日誌抄

46.6.1～46.8.31

- 6・1 特別展「カラフト・アイヌ展」の後片付けのため
7日まで臨時休館
6・5 科学教室開催、五稜郭分館18名参加
6・8 平常展開催
〃 郷土資料館展示替
6・9 箱館戦争関係資料調査実施(五稜郭取水路付近)
6・10 道南博物館職員研修会 於江差町千代学芸員出席
6・12 大船渡市 千葉蘭児氏貝類研究のため来館
〃 植物研究会開催
〃 道開拓記念館 武内収太氏来館
6・13 市民考古学講座開催 縄文土器と文様について、
金田功氏
6・16 箱館戦争関係資料調査実施(七飯仁山峠下付近)
6・20 大日本茶道学会流茶会 於杉花亭170名参加
6・24 五稜郭兵糧庫内資料整理実施
6・30 人事異動により斎藤見習配置される
7・2 北海道博物館大会 於札幌市 館長出席
〃 道監査委員金沢氏外1名視察のため来館
7・10 植物研究会開催
7・11 市民考古学講座開催 段丘地形と古代集落、
瀬川秀良氏
〃 遺跡発掘事前調査現場視察、館長外2名
7・20 埋蔵文化財発掘調査始まる31日まで
7・21 長野県議会社会文教委員長矢野義郎氏外10名視察
のため来館
7・27 夏期理科相談室開設30日まで 於五稜郭分館
7・30 郷土資料館特別展開催準備のため臨時休館
31日まで
8・1 「港まつりを祝して、明治時代をしのぶ展」開催
於郷土資料館
8・3 開発事業団吉山課長、山内係長、流通センター用
地遺跡発掘の件にて来館
8・8 市民考古学講座開催 古代人骨は語る、松岡悟氏
8・9～8・10 流通センター用地の調査(開発事業団、
亀田町教委、博物館)
8・10 キナンボ号乗組員成功あいさつのため来館
8・12 夏期理科相談室開設14日まで 於五稜郭分館
8・13 館長、陸奥湾養殖事業調査の件にて浅虫へ出張
20日まで
8・20 岩見沢市議会議員4名視察のため来館
8・22 明日を開く北海道青年開発会議一行51名施設見学
のため来館
8・26 青函文化交流団(青森市側)一行50名来館
8・28 日本銀行福井氏、電力中央研究所外山茂氏志海苔
古銭研究のため来館

Hakodate City Museum News

SARANIP—サラニップ— No.3 1971.10.1.発行
 編集・発行 市立函館博物館 (TEL0138-23-5480)
 北海道函館市青柳町・函館公園内(〒040)